

## 第八章 戦国の動乱と垣屋

### 第一節 因幡戦争

#### 日光院の寺田とその寄進者

大岡山を巡る四周の有力農民については、既に第六章第一節大岡山四周の有力農民の項においてふれておいた。では垣屋が有勢となり、守護大名、山名に比肩するようになったこの戦国時代には、どのような人達が、気多郡内に農地を所有していたことだろうか。この点については、『大岡寺文書』は何にも語ってくれない。八鹿町石原所在の日光院が所蔵する文書を手がかりに見よう。

日光院には、但馬の各地の人たちから、所領が数多く寄進されているが、その中で気多郡の土地を寄進した人々を整理してみると、次の如くである。

(1) 長谷部遠連<sup>とほつる</sup>。長谷部は寿永の内乱期、高倉宮以仁王のために、独り奮戦して死んだ長谷部信連の後をひくとの伝承を持つ氏族で、各地に栄えていたが、但馬の長谷部も、既に鎌倉時代には、養父郡石和上郷一



写真108 長原修理亮遠連寄進状  
(八鹿町 日光院文書)

分身の地頭として現われ、南北朝争乱期には、但馬守護になった一時期もあるほどの豪族だった。しかし、その後、山名の家臣団の中には、永らく表立って、顔を見せてこない。府中の与所分の中、こうの市ば(市場)の畠、二百四十歩を寄進している。

(2) 田結庄能□。田結庄は豊岡市田結の地から大きくなった氏で、山名持豊のころ、播磨明石郡へ郡代を勤めた田結庄周防入道は、この系に属する人であろう。田結庄は、やがて、山名の四天王の一に数えられる。永正十四年(一五一七)には、田結庄持久という人物も知られてくる。右京亮能□もこの系の一人であろうが、名前がはつきりしていない。天文三年(一五三四)、府中最所分の田地一反を寄進している。

(3) 田辺大和守重寄。出石町宮内にある惣持寺の天文四年(一五三五)の、十一面観音造立寄進状によると、田辺山城守・田辺八郎などの名が見えるから、田辺大和守もこの田辺に所縁のある人で、恐らく山名の居城である此盗山城の近くを、拠所としていた武士であろう。永正十六年(一五一九)、気多郡の内、トイ松岡の地で壹反の田地を寄進している。トイは土居のことであろう。

(4) 徳丸孫左衛門。『日光院文書』には、「徳丸孫左衛門跡西下内徳久」とある。西下は「ニシノゲ」と読むべきであろう。西の気、即ち気多郡の西部ということで、現在でも、日高町の山間部の総称として使われている言葉だ。この西下の徳久名を、かつてのある時期、所有していたのが徳丸孫左衛門で、これを伝領し

表17 日光院に気多郡から寄進した人々

高田郷	府中	庄	三方		西下	
			分	所	名	一
時	最	土居・松岡	下田観音寺村	本所 大井ノ上 クルミカキ ミタル	徳久名	三分之一
国	所	田辺大和守重寄	垣屋遠忠	垣屋豊知	徳丸孫左衛門 河越治久	田原大隅守直綱
天文十七年	長谷部遠連	田結庄右京亮能口	明応九年	明応二年	永正十三年 永正十六年	天文二年

たのは河越治久だった。河越は、徳久名の段銭、二十貫を寄進している。  
 (5) 田原直綱。大隅守と国守名を名乗っているから、山名の家臣とすれば、相当の上位者だろうが、素性が全くわからぬ人だ。西下荘三分の内の田地壹反を寄進している。

(6) この外、垣屋豊知・垣屋遠忠も、三方荘の土地を寄進している。すなわち、垣屋豊知は、宵田城主として現われ、天文八年（一五三九）に、死したと伝えられる人だ。永正十五年（二五一八）、三方荘本所分を寄進している。垣屋遠忠も、明応二年（一四九三）と、明応九年（一五〇〇）の、二回にわたって、三方荘の所縁の地を寄進している。ところが、『垣屋系図』によると、既に述べた如く、垣屋遠忠は、これより以前の文明八年（一四七六）、播磨国英賀にて、赤松政

則の軍と戦い、息子の右衛門と共に討死したことになる人だ。恐らく、『垣屋系図』が間違っている  
 と見なければならぬ。  
 さて、これらを表示すれば、上の如くである。

垣屋とその所領

これが、気多郡において知られる、戦国末期の所領関係のすべてだ。これだけから推論することは、甚だ危険を伴うが、それでも、この所領関係から見て、垣屋は、三方

莊、すなわち三方地区には、濃厚に所領を有しているが、気多郡の他の地域には、所領が、そう多くないと言えそうだ。もともと、垣屋は、関東から但馬にやって来た時、まづ円山川下流域に居を占め、やがて但馬守護太田が、後醍醐天皇の建武新政に加担して、没落したために、その守護領であった楽前の地を継承して、これを根拠地としたのだから、三方地区に所領が集中しており、気多郡のその他の地域には、あまり目立つ程の所領が存在していないようだ。そして、これらの所領は、守護大名である山名が、知行地としてあて行った土地だったのであり、垣屋が紅旗をかかけ、戎撃ののちに、手に入れた所領ではなかったのである。そして、守護大名山名は、気多郡の山間部の西気地区や、平野部の国府地区を、養父や、出石や、城崎あたりを、それぞれの根拠地としている家臣の有力者たちに知行地として恩給している。

こうして見ると、垣屋は、宵田に城を築いたり、竹野谷の中流部、轟にも一門を分けて居住させたりしているが、その中心とする根拠地は、案外、三方地区一帯の地域ではなかったろうか。

なお、垣屋の家来に徳吉・安長・大垣新右衛門がいたことが、『武家事紀』によって知られる。徳吉・安長は垣屋の家老であり、大垣は、但馬・丹後における高名の弓の射手だったというが、気多郡に関係があるかどうかは、判然としていない。

### 観音寺村

さて、このような垣屋の所領の中、明応九年（一五〇〇）、垣屋遠忠が日光院に寄進した土地は、三方荘本所分という中でも、「観音寺村」だという。この事は注意しなければならぬことだ。



写真109 伝 近衛天皇寄進釈迦涅槃図と裏書（観音寺蔵）

ところで、観音寺というのは、寺伝によると、天平二十年（七四八）、行基が開基し、寛仁元年（一〇一七）、恵心の中興になると伝える。また、久安年中（一一四五～五二）、近衛天皇の勅願所になったとも伝えられている。なかなか隆盛だったらしく、永禄五年（一五六二）には、别当坊・華嚴院・五大院・辻之坊・金乗坊・来迎院・常喜院・谷之坊の八支院を数えていた。

さて、観音寺は、既に鎌倉時代には、熊野山領として現れ、九町四反の寺領は、寺田三町、不動堂二町の構成で、その他、課税の対象地たる定田が、四町四反、存在していた。これらの所領は、一地にまとまって存在しているのでなく、あちこちに、筆をわけて分散していた。また、観音寺は、地域的には三方荘の境域

内であると、同時に、三方郷の域内に存在していたから、観音寺の寺領と混じて、国衙が支配している地域や、三方荘の土地も、存在しているわけだ。そして、既にふれた如く、明応二年（一四九三）、垣屋遠忠は、三方荘本所分内にて、三反の地を妙見社に寄進しているし、また、引き続



写真110 観音寺村遠景

き明応九年（一五〇〇）にも、三方荘本所分観音寺村にて、下田町町の田地も寄進しているのである。この本所というのは、荘園の領主の上に立つ名義上の所有者を指す言葉ではなく、むしろ、三方荘の中核地といった意味合いの言葉であろうから、その中核部の中に、観音寺村という名前が出て来ているわけだ。三方荘は、観音寺領を含みつつ、観音寺の直下に成立した農民の地縁的な寄り合いが集って、「村」を作り出している。

土地という点に力点をおけば、寺領や国衙領や荘園などが入りまじって、個々別々に支配しているにもかかわらず、この個別支配を乗り越えて、法灯を燃しつづけている観音寺の近くの住民が、一つのまとまった「村」を作って来ている。入りくんだ土地支配に関係なく、「村」という地域が成立している。農民たちの自主的な生活の場が形成されて来たのであって、気多郡では、この山間部の「観音寺村」だけではなく、平野部では、「清冷寺村」が知られて来ている。このような、まとまりは、このころ、但馬でも発生しかかっている。出石郡では、「平田村」・「増法寺村」・「小谷村」・「坂本村」・「秦守村」・「はの村」・「すげ村」、養父郡では、「尼子村」・「津付村」・「山田村」、美含郡では「安木村」・「丹生村」、二方郡では、「新田村」などが知られてくる。

この村の住人たちは、いづれも、莊園領主や領家などからすれば、耕作の主体者であって、その限り、「作人」と呼ばれている人たちであった。明応二年（一四九三）、三方莊本所分内では、助左衛門・右近大夫・道泉という作人の名が見え、年紀は不詳であるが、大体このころと思われるものだ。八代の安養寺田では、源七という作人の名が見えている。また、永正十七年（一五二〇）観音寺の本尊の建立が行われた。この時の勸進札によると、造立願主の名前や観音寺所縁の仏僧と思われる人たちの他に、安衛門・三郎右衛門・千代女・三郎太夫・栗山弥吉衛門・四郎左衛門・三郎衛門の名前が出てくる。男子だけでなく、女子の名前も知られ、観音寺の住人だけでなく栗山の住人の名前も知られてくる。

このような住民を合せ「村」を、がっちりとして手に入れて領主権を打ち立てようとするのが、戦国大名のねらいであったし、垣屋がこの後も、引き続き大きな勢力を得ているのは、近くに阿瀬金山という大きな経済源があった地に、このような、新しい地域体である「村」をがっしりと基盤にしていたからだ。

### 因幡戦争

さて、山名誠豊は、父政豊があれほど、播磨出兵に、手痛い損害を受けていたことを、充分に知っている筈にもかかわらず、播磨出兵を行い、為すことなく、大永三年（一五二三）、但馬に退却してしまう。この播磨出兵に、垣屋は如何なる役割を演じたのか、知るべき資料は何一つ現存しない。恐らく、山名は垣屋との協調なくしては、播磨出兵、そのものの企画すら立てられなかったことだろう。

とかくする中に因幡の状況が、但馬に大きな影響を与えるようになる。このころ、出雲地方から、勢力を伸ばしていた尼子の触手が、すっぱりと伯耆地方を包み、尼子に圧迫された伯耆衆は、争って因幡・但馬に

逃げ込み、山名誠豊に頼ったからだ。このため、但馬山名の力は、大きく因幡に張り出す。大永八年（一五二八）、山名誠豊は三十三歳の若さで死去するが、代って、但馬守護となった山名祐豊は、この情勢を足掛かりに、因幡に強力な勢力圏を設定しようとする。これは守護大名山名が、戦国大名山名に転化しようとする一つの動きではあったが、三十年にわたる因幡戦争のあと、やっとの事で、因幡を但馬の勢力下に置いてはみたものの、山名をとりまく四周の形勢は、きびしかった。西方では、出雲の尼子の勢力を押えて、安芸の毛利の軍事力がのしかかって来るし、東の方からは、織田信長の力がぐんぐんと張り出して来る。この東西の勢力の吹きだまりが、但馬であった。山名祐豊は、この間にあって、ある時期には、東の力に頼り、また、ある時期には、西の力を利用して、戦国大名化への道をひたすらに、探し求めていたが、この時、山名祐豊のように、右の情況や、左の形勢に気を使うことなく、一途に西の勢力にたより続け、東の勢力に対抗しようとしていたのが、垣屋豊統であって、轟城主系の政略路線であった。これに対して、本流の垣屋光成は、守護山名祐豊の力を利用しつつ、東の勢力に対抗しようとしたが、その実態面に於ては微温的であった。かくて垣屋光成は、祐豊の因幡戦争に関連して尼子党として現われ、垣屋豊継は毛利党として、羽柴秀吉に代置される。東の織田の勢力には、徹底的に抵抗していた。この経過を追って見よう。

## 第二節 垣屋と毛利

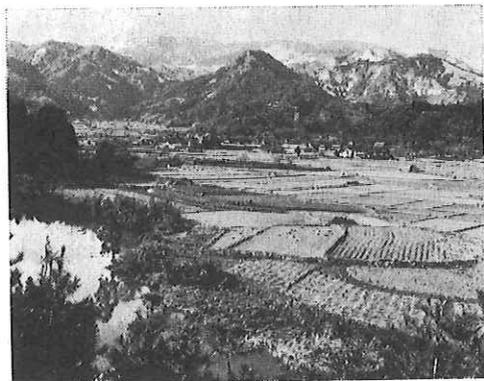


写真111 鶴ヶ峯城跡遠望（観音寺）

### 信長の雲、伯、因合力作戦と垣屋

とかくする中に、尼子は、毛利のために追上げられ、永禄九年（一五六六）、尼子晴久は、毛利に降った。諸国に流浪した尼子の譜代の諸将の中で、山中幸盛は、尼子晴久を擁して尼子の再興を計り、出雲に入国しようとして、永禄十二年（一五六九）、春、京都を出て、但馬にはいった。幸盛が糾合した尼子の残党は二千人だったという。一説によると、名字を名乗るもの六十三人、雑兵を合わせて、二百余人だったともいうが、彼等が但馬に於て頼った武將は、垣屋播磨守だった。このころ、まだ、東の織田の影響力は、但馬に直接及んでいなかった。むしろ、西の毛利の力がこの但馬に、じわじわと押しよせていた。それで、守護の山名祐豊は、毛利の軍事力が強大化するのを恐れて、尼子救援に力を注いでいた。垣屋光成は、この祐豊の意向をうけて、尼子勝久や山中幸盛の出雲奮回作戦に、好意的な援助を与えていたのだ。かくて、尼子の軍団は、但馬の人、奈佐日本之助の、軍船に乗船して、出雲に進攻し、一時は、形勢が大いに振った。

毛利は、その時、九州で大友と戦っていたから、この出雲の情勢に対処するために、織田信長に援助を依頼した。

そこで、これを承知した織田信長は、雲伯因合力と称して、但馬の山名を背後から攻めようと、永禄十二年（一五六九）八月、木下秀吉、坂井政尚らに畿内の勢二万人をつけて、但馬に侵攻させた。

八月一日、攻撃を開始したと見るや、生野銀山をはじめ、此盜、垣屋城など、十日の中に十八を攻め落とすという電撃戦で、僅かに、田結庄城と鶴ヶ峯城（観音寺城）だけが攻略を免がれた。本城此盜城を攻められて、山名祐豊は、いたたまらず、泉州堺へと亡命する。

さて、ここにいる垣屋城とは、はじめ垣屋が関東から但馬にやって来た時、手に入れた円山川下流域地帯に築造した城のことであろう。恐らく、現在の豊岡の神武山に築かれていた城ではなかったろうか。そして、田結庄城は、恐らく、豊岡地域の三江地区と田鶴野地区の境に所在している愛宕山に築かれていた城のことであろう。鶴城ともいっていた。また、観音寺城は、いうまでもなく、日高町域の、三方地区に屹立している観音寺山に築かれた城のことで、鶴ヶ峯城とも言われていたものに違いない。この時、鶴ヶ峯の城主は、恐らく垣屋光成であったろう。秀吉は、但馬に強襲をかけながら、この二城のみを残して引き上げた背景には、畿内を中心とする地域の軍事情勢の展開も、もちろん影響していたことだろうが、田結庄や垣屋光成にとっては、初めて経験する秀吉軍の巧妙な戦術や圧倒的な軍力をぶちまかされてみると、いままさらの如く、但馬の軍事力のもろさが、身にひしひしと感じられ、徹底的攻戦の意志を放棄したため、田結庄城と観音寺城の二城は、秀吉の攻囲を免れたものではなかったろうか。

また、当時織田は、中国に於て毛利の勢力が強大化することを嫌がって、尼子を正面に立てて、毛利と戦わせようとしていたから尼子に対して同情的な立場をとる但馬守護山名祐豊や垣屋光成を、徹底的に痛めつけるよりは、温存しておいた方が得策だとの政略もからんでいたのではなからうか。

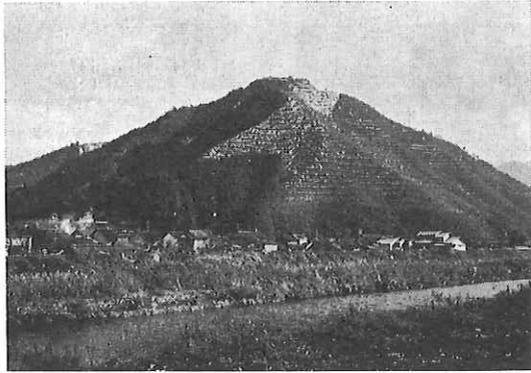


写真112 出石城跡遠望（出石町）

### 出石城と垣屋

この永禄十二年（一五六九）の、秀吉の但馬進攻に当って、守護大名山名祐豊は、秀吉の実力を知らずに、真正面から、ぶつかって敗れ、但馬を追われて泉州の堺へ亡命した。山名の四天王の一人、田結庄は、田結庄城の破却を免れていることを思うと、恐らく秀吉に降ったものであろう。織田信長の一部将に過ぎない木下秀吉の軍事力の強勢さを目の前にして、このような部将を、いくたりも統率している信長の軍事力は底知れないものと見てとり、悔るべきものではないとの認識に至ったものだろうか。これより後は、一途に織田に身を寄せようとする。

また、垣屋光成も、本拠地、観音寺城を保持している点から見て、田結庄と同様に、秀吉の軍門に降ったものである。しかし、田結庄が信長の勢威になびいて、織田党色を示して来たのに対し、却って轟城主系の垣屋豊統は、この織田こそ、倒すべき敵と、指向し、そのために、中国の毛利との提携を計ってくる。垣屋豊統は、毛利党として、現われてくる。

かくて、垣屋一門は、秀吉が但馬から撤収し、その軍事力が、但馬から遠のき、かつ、山名祐豊が泉州の堺に亡命し、この但馬には統治者が不在となったのを機として、西の毛利と組み、毛利の威力を背景に負うことによって、公然と但馬の支配を取り仕切ってくるようになったものらしい。山名に代って、垣屋の力が

大きくのび、但馬を覆ってしまう。

かくて、垣屋は祐豊が亡命したため、空城となった出石の城に、入り込んで来たものらしい。それで、翌永禄十三年（一五七〇）春、祐豊は、信長に礼銭千貫文を贈って、但馬入国を果そうとするが、出石城には、垣屋が腰を据えているため、祐豊は、するすると、但馬に入り込めなかった。

祐豊が、但馬を放棄してから、僅か三、四カ月の短期間に、このように垣屋豊統が強勢化を示している事に対して、但馬守護山名の家臣団の中にも、強い反発が生じることは当然だった。織田党の田結庄との反目もさりながら、山名の中堅級の家臣団は、垣屋に対して、直接的な反撃に出たのである。今や垣屋が、居城としている子守城を責め立て、ここから垣屋を追い立てようとする。子守城は、出石の南城のことである。中堅家臣団のこの子守城攻めは成功したものらしい。垣屋は、子守城を祐豊に空け渡したものだろうか、山名祐豊は、永禄十三年（一五七〇）の初春を子守城で迎える事が出来た。

### 芸伯和睦と垣屋

さて、信長は雲伯因合力作戦と称して、但馬を席卷して引き上げた。表向きには毛利支援と称しているが、生野銀山の鉢山資源が目当てであった。生野鉢山を完全に掌中化するために、山名の高級家臣団である太田垣や垣屋の発言力を封じて、山名祐豊のみを利用しようとしていた。締め出された太田垣や垣屋の立場には、いろいろと思惑がからんでいた。太田垣は毛利の力に頼り切ったが、垣屋は、楽前城主系の光成の立場が弱められ、轟城主系の豊統の力が伸びてくる。このことのために、永禄十二年（一五六九）の春には、あれほど尼子援助のために力を入れていたにもかかわらず、翌年の

元亀元年（一五七〇）には、掌を返す如く、かえって、尼子支援の立場を離れて、尼子と戦っている毛利の側に組みして来た。

このことを、更に決定的にしたのが、天正元年（一五七三）の毛利の因幡・但馬出兵作戦だ。毛利は、尼子排除のため、引き続き織田信長の支援作戦を当てにしていた。ところが織田は、こっそりと陰で尼子を援助していた。織田のこの意向は、直ちに但馬の山名祐豊に反映する。毛利のため、再び出雲を追われていた尼子が、この天正三年（一五七五）、再び但馬にはいれたのも、山名祐豊の援助があったればこそ可能だった。かくして、尼子はまたもや但馬から、因幡侵出の機をねらう。

そこで、毛利は、織田の支援作戦は、どうやら、空手形に過ぎないと見てとって、因幡、但馬に於ける尼子及びこれに同調する勢力を独力で排除しようとして、因幡、但馬へ出兵して来た。毛利は因幡の山名豊国や但馬二方郡の芦屋城の塩治を降し、機を見て、但馬侵入の姿を見せると、但馬では、山名祐豊を始め、垣屋豊統・垣屋播磨守・太田垣輝延らは、皆前後して降服してしまった。かくて、但馬に毛利の力が大きく作用して来ると、但馬は、どうしても、毛利の動向に規制されてくる。永禄十二年（一五六九）の織田方の軍事的な勝利の成果は、色あせたものになってしまう。逆に、毛利党である垣屋豊統の力が、前面に押し出て来て、決定的なものとなってくる。毛利の傘下に入った垣屋豊統は、但馬に、織田の勢力が入り込ませないように躍起となる。織田側の力が但馬からはっきりと排除される様子を見てとると、但馬守護、山名祐豊も、織田の救援を期待し得なくなつて、毛利へとなびいていく。山名をして、このように、毛利党へと、傾斜させて行つたのは、外ならぬ垣屋豊統の力であった。垣屋は、今や、主家山名を離れて自立の立場を保持

し、山名にまさる政治的力量のほどを發揮してくる。

かくて、天正三年（一五七五）、芸但和睦の議が熟し、正月には、山名祐豊の居城、子守城には、毛利の平和特使が訪う。織田信長こそ、毛利・山名の共同の敵だときめつけ、信長追放のため、軍事相互援助協定が成立し、五月、両者は誓詞の交換を完了するのである。この日に至るまでの工作は、すべて、垣屋の手になるものであった。ここに、芸但和睦条約の批准が完了し、毛利は、宣言を發して、但馬は毛利の分国だと表明する。この時こそ、毛利党としての垣屋豊統にとっては、最良の日だったろう。

#### 毛利山陰道直上作戦と垣屋

毛利は、正面切って織田と対抗するために、三つの軍事進攻路を規定していた。一は山陽道を通って行く正道であり、二は山陰道を経て但馬・丹波路經由、京都への側道であり、三つは、瀬戸内海を利用して、大阪上陸京都への海上の道であった。とは言え、この三道を併進することは、毛利の軍事を分散させ、各個に撃破される公算が強いと認定し、山陽道東上作戦に全力を集中する手筈を進めていた。ところが芸但和睦が成立するほんの少し前ころより、垣屋豊統は、盛んに毛利の軍事援助を期待し、但馬から織田信長の勢力を排除しようと、やっきになる。毛利が但馬に進駐することが無理なれば、せめて、因幡の尼子を討って、同族、因幡の山名豊国の立場を開放して欲しいと言うのである。

毛利として、山陽道東上作戦に全力を集中したといいつつも、芸但和睦の条項にのっとって、但馬支援のために軍隊を投入する必要と責任は充分に認めていたが、折しも、冬季の但馬の気候は、毛利の兵力の展開

をさまたげた。若桜から、氷ノ山越えに但馬に入るには、積雪が大いに障害となっていた。このころ、垣屋豊統は、毛利の山陰道東上作戦の展開を絶叫して、次のように言ったという。

即ち、丹波の国の住人、赤井刑部少輔幸家・萩野悪右衛門直正・石川弥七郎繁俊・宇野六弥太・波多野伯耆守・並びに但馬国の垣屋播磨守・同じく新三郎・同じく権兵衛・同じく軍監などが一体になって、吉川元春に急使を出して、「丹波の国までお出かけ下さればわれら一同が先頭へ立ちます。愛宕山にのぼって京都を眼下に見下して各所に指図すれば必勝は間違いありません。きっと信長は本能寺におり、また軍勢は嗟峨、鳴滝のあたりまで出て陣取りましょう。その時は、味方の兵士を京都内に隠しおき、合図を決め、よい風向きを待って東南に火を放ち、西北から切りこめば、どれほど勇猛な信長とはいえ、一日で敗れるに違いありません。京都の戦いにさえ勝てば、逃げる敵を追って安土山まで押しかけ、織田の一族を根こそぎにすることも容易なはず、是非とも近々に御出発ください」と勧めていたという。

### 垣屋光成と八木豊信

垣屋豊統が、あせりにも似て、芸但和睦条項ののっとなって、毛利の但馬への出兵を督促しているのは、実は但馬の情勢に変化のきざしが見えたからだった。垣屋豊統の画策によって、芸但和睦が成立し、但馬は毛利色に塗るかえられ、これによって、垣屋の優位が決定したかに見えていたが、東方よりする織田の巻き返しが、顕著となって来ていた。

まづ、山名祐豊自身が脱落して、織田との接触を持ち出した。また、祐豊の中堅級の家臣団の中には、垣屋豊統の政策に反対するものもいたりして、祐豊支持を表明していたから、祐豊が、織田党へと傾斜する姿

勢を示すと、これによって、中堅家臣団は、ますます織田党へと心を寄せることになる。轟城主系の垣屋豊統の軍事路線に対する批判は、祐豊の中堅家臣団の間だけに留まらなかった。先に尼子勝久の出雲入りを援助していた垣屋光成も、この中堅家臣団に対して同調的な態度を見せて来た。この情勢を、山名の四天王の一人であると共に毛利党であった八木豊信が分析して、「山鹿（山中幸盛）儀は申すに及ばず、宍田・西下・立源太（立原久綱）存分有るの様、風聞するといえども、ただ今の所、珍儀これなく候」といつている。即ち八木豊信は宍田・西下の面々が、山中鹿之助や因幡の立原久綱らと提携して、尼子勝久支援の立場に立っているらしいと判断している。ここに宍田・西下という名前が取り上げられていることは興味深い。この宍田・西下というのは人名ではなくて地名であろう。それというのは、気多郡の中に宍田という所があり、ここには垣屋の城があった、また西下というのは、「ニシノゲ」と読む字であろう。「西下」は即ち「西ノ気」、つまり気多郡の西部ということでここにも鶴ヶ峯城に代表される垣屋の城があった。そして、この宍田城・鶴ヶ峯城に係する垣屋は、垣屋光成及びその族で、彼等は轟城主系の垣屋とは、別の政治路線を持ち、尼子支援の立場の武士だった。それだけに、毛利党の八木豊信にとってはいやな存在であったのだろう。垣屋光成とか垣屋播磨守とか、あるいは略して垣播というような呼び名を用いずに宍田・西下と呼び捨てにしている。

それでも、毛利党としての八木豊信は何が何んでも、この楽々前城主系の垣屋一族を自分の陣営に繰り入れ、垣屋は一族全部が一体となって、毛利党へ加担させたかった。それで、毛利元春が但馬出兵を敢行し、垣屋光成派に圧力を掛けて呉れば、屈して毛利党に変身するだろうと観測もしていた。

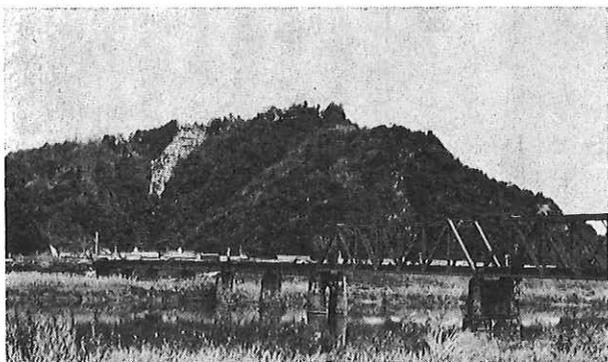


写真113 鶴城跡（愛宕山）遠望（豊岡市）

そして、この時、反毛利の色彩を強くしていたのは、田結庄であった。八木豊信は、この時、垣屋光成を宍田・西下と呼び捨てにした如く、田結庄に対しても、城崎と呼び捨てている。垣屋光成が毛利色を濃くしない原因の一つは、この田結庄の動向がからんでいたかも知れない。

#### 野田合戦

何はともあれ、円山川下流域の一带にわたって、守護山名の中堅家臣団ばかりか、高級家臣団である田結庄是義が、織田党の旗印をかかけ、これに垣屋光成までが、心情的に傾いている。この情勢は、轟城主の垣屋豊統にとっては許し難い批判分子と映じてくる。

この気多郡や城崎郡、一帯の地は、もともと、垣屋が但馬入りをした時から、垣屋とは深い関係にあった土地だ。

つまり、垣屋の勢力地域である筈の中から、離叛者が出現し、織田党となつて現われている。正に垣屋にとつては、一刻も許せぬ不利な情勢が醸成されつつある。とり分け、山名の高級家臣団の一人である田結庄は、もともとから織田への依拠の心持が強い武士だったが、ここに織田色を濃厚にして来たのは、垣屋豊統にとつては、許せぬ勢力であった。垣屋豊統は、田結庄に対し

て、正面切つて鬪争をいどみ、これに成功する。これは野田合戦と呼ばれる戦闘であつた。

即ち、一説によると、垣屋六世駿河守豊統は元亀元年（一五七〇）、城崎郡宮井大原山養寿院に於て、田結庄是義のため囲まれて自殺し、七世、播磨守重興（後光成と改名）、田結庄是義を討ちて父の讎を復すといふ。この時、田結庄に討たれたのは、豊統ではなくて、垣屋統成だとも言う説があつて、一定してない。

また、別の説では、逆に垣屋豊統が田結庄是義を打ち取つたとも語られている。天正三年（一五七五）六月、是義が、豊岡市長谷の燕子花かぎはなを見に出掛けた。この地は山名の初代、時義が三河の八橋になぞらえて常に遊観していた所だつた。是義の宴が盛り上がつてきた時、たまたま近所で、垣屋播磨守の家来が鳥を撃つた鉄砲弾がはずれ、是義の宴席に飛び込んできた。怒つた是義は、この垣屋の家来を捕えて殺した。これが原因となつて、是義と豊統とは不和となり、豊統は遺恨晴らしに、是義のすきを見て襲いかかつた。天正三年（一五七五）十月十五日、是義が大原山養寿院に詣でた留守を見計つて、豊統は一族の兵を率いて、田結庄の鶴城を襲つた。是義の妻子は僅かに脱出し、城は落ちた。變を聞いて馳せ帰つた是義も、円山川を背に必死になつて、野田の田圃で戦つたが、遂に垣屋のために屈し、十月十七日、正福寺に入つて自殺し、二日にわたる争乱が終つたという。この合戦が「野田合戦」と呼ばれるもので、垣屋のため田結庄は滅亡してしまつた如く語られている。垣屋が但馬守護山名を圧して、自立の態勢をとるためには、まず毛利の援助が必要だったのであり、これに対立するものは、徹底的に打ちのめす必要があつた。垣屋と田結庄のこの交戦の状態を、山名の四天王の一人で、毛利党と思われる八木豊信は、天正三年（一五七五）十一月二十四日、

「田結庄表に於て、垣駿(垣屋豊継)は一戦に及ばれ、勝利を得られたので、海老手の城を、今は異議なく所持されていますから、別に御氣遣いされませぬ様に」と吉川元春に報じている。海老手城は、豊岡市新堂にあり、垣屋の初代、垣屋重教が但馬入りをした時、初めて手に入れた亀崎の城の別名だと考えられている。

このように、野田合戦は、山名の家臣団の私怨、私闘の形をもって伝えられているが、その根底において、毛利党の垣屋豊統と織田党の田結庄是義との間に繰りひろげられた政策の主導権争いが存していたのだ。垣屋豊統は、この戦闘に轟城主系の一族の命運をかけていたものだろう。豊統の子の宗時も、父に従って戦闘に参加している。この時楽々前城系の垣屋光成も、垣屋豊統と行動を一つにして、田結庄是義を攻めている。もともと、垣屋光成は轟城主の垣屋豊統の政治路線に同調はしていないが、垣屋の一族が田結庄に對して戦争を決意した時、家族の立場から見捨てる訳には行かなかったからだろうか。ここに垣屋の全一族の共同戦線が展開していた。

轟の垣屋豊統が、田結庄を打ち敗かしたことは、つまり、但馬に於ける毛利党の勝利を示すものだった。ところで野田合戦の直前の時期に但馬に於ける織田党と毛利党の緊張状態が続いている時、丹波の毛利党の荻野直正は、但馬に侵入し、山名氏政の出石城、太田垣輝延の竹田城を攻めた。垣屋豊統の作戦援助のための陽動作戦だったろうが、荻野の虚をついて織田信長は明智光秀を丹波に派遣してくる。明智の丹波出兵は、側面から、但馬の織田党を支援する形をとったが、豊岡の野田の地では、田結庄が潰滅してしまい、毛利党の垣屋豊統の力が大きくのびる。ある意味では、織田の戦略の失敗だといえよう。また、この天正三年(一五七五)には、轟城主の垣屋駿河守宗時は、長弥次郎を援けて、林甫城で塩冶周防守を討っている。

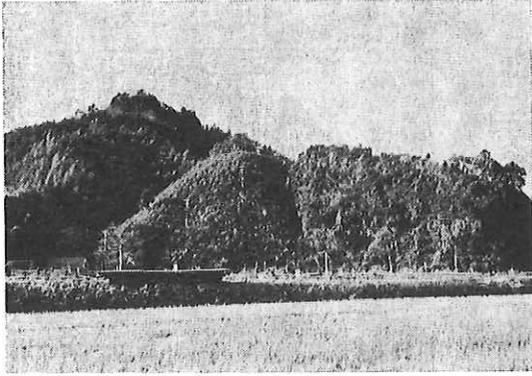


写真114 轟城跡遠望（竹野町）

垣屋は、自己の政策に反対する者は、一切、容赦しなかった。そしてそのすべてを圧倒してしまった。

さて、垣屋光成はかねてから、京都、天龍寺の妙智院の住僧、策彦周良に、自己の雅称の選択を願っていた。策彦周良は、織田信長のために、岐阜の地名を選じたことのある僧だった。策彦は、天正四年（一五七六）の春光成のために、雅辞として「悦岩」という字を贈り、それに和して一篇の禅詩を附しているが、その中で、「古柏蕭條自可怡、長松繁茂總相宣」と言っている。正に野田合戦に勝ち、但馬の織田党を押し切

った垣屋一門の繁栄ぶりを樹木の繁るさまになぞらえれば、正に、松樹が多く枝葉を延ばし張っている姿に近かったのだ。

#### 吉川元春、竹野へ進出す

轟の垣屋豊統は、同輩級の田結庄や塩冶を、武力に訴えて打ち倒し、但馬の

毛利党の危機を回避した。この機をつかまえて、天え声を大にして、毛利の丹但出兵を懲瀆する。これには吉川元春も、心を打たれた様子であった。毛利の陣営では、山陽道東上作戦に全力を集中しようとの意見が強い時だった。それで、元春は上月城攻撃支援を取りやめて、「出雲・伯耆・石見の軍勢を集めると二万五千か三万人になるだろうから、この中、五千人を方々の押さえに残しても、二万五千はおるだろう。丹波・但馬の国でも軍勢は一万あまりあろう。両

方合わせれば三万五、六千人だ。この軍勢で愛宕山に登り陣を張ろう」といい、山陰道東上作戦を展開しようとしていた。しかし、小早川隆景は、元春に、危い橋を渡るようなことはするなと再三にわたって中止を勧めたのでその意見に従って、山陰道作戦を取り止めて、播磨上月城攻めに参加するが、その後、織田の圧力が、丹波から但馬へと強く打ち出されてくると、垣屋豊統は、毛利党に終始する限りにおいては、ひたすらに毛利にたよらねばならぬ立場に追い込まれる。悲鳴にも似た援助要請を、吉川元春に伝える。「近年、芸州に味方してはきたが、毛利は一向に援軍を送ってこない。数年の戦争で困窮している」と苦境を訴える。遂に元春は心を動かされ、四周の反対を断呼として押し切って、但馬に進出して来た。

吉川元春は、竹野に至り、作戦を指揮した。恐らく、鳥取から海上、竹野に着いたものであり、竹野の奥、轟城が本営だったろう。このころ、毛利の軍略は、但馬を内部・外部に分け、外部の海岸部の竹野諸寄間は、垣屋豊統の管轄とさせていた。

垣屋は、このころ、二方郡と関係を持つようになったらしい。浜坂町清富の北、祝音山の東頂にある清富城に、天正のころ、美合郡轟城主垣屋駿河守が城主として、三カ年在城していたとの伝承があるのは、恐らく、このころ、垣屋が、但馬の海岸線を管轄していたことに関係あるものだろうか。

さて、この時、但馬内部の竹野と竹田間を監視していたのが、八木・太田垣だった。吉川元春が、竹野に入ったことによって、但馬の毛利党の勢力は大いに振り、但馬だけでなく丹後まで及んだが、それも東の間だった。兵站線が延び切った毛利は、苦境に陥る。かくて、毛利は山陰道方面で敗れるようなことが起きれば、その影響は、直ちに山陽道の戦線に及ぶことが明白となって来た。但馬や丹波の毛利党が、いくら援兵

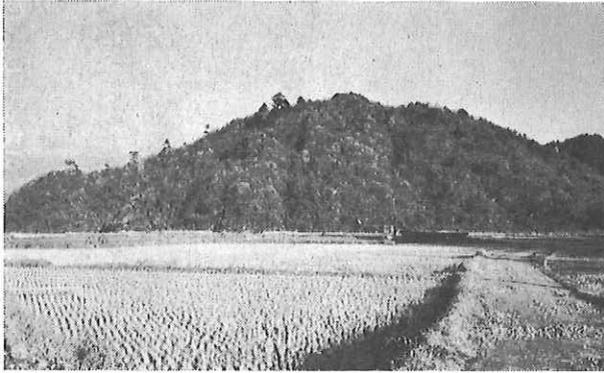


写真115 上郷城跡遠望（上郷）

を要請しても、そのみにかかわっているわけには行かぬようになった。垣屋豊統の熱意にはだされて、毛利はひとたび、但馬に進出して見たものの、戦略的には失敗だった。天正七年（一五七九）十一月、但馬・因幡から総撤収を行った。垣屋豊統は毛利の孤児となった。

### 水生成の戦

天正七年（一五七九）の末から、八年の始めごろにかけて、羽柴秀吉は、やつのことで播磨において優位態勢を確立する。秀吉は毛利に対しては、山陰道方面と山陽道方面の二正面から攻勢を敢行する。毛利の影響力が全く消えてしまった但馬は全く秀吉の山陰道西進作戦の基地と化してしまった。既に秀吉は、天正五年（一五七七）、但馬に入り、弟、羽柴秀長を竹田城に詰めさせて、但馬経略に専念させていた。検地を行い、兵糧を確保していた。今や、秀吉は、山陽道方面において、余力を得ると、毛利の力が総撤退した但馬には目もくれなかった。目標を因幡の毛利勢力に定めた。但馬は秀吉の山陰道西進作戦の進攻路と化してしまった。この道に立ちはだかるものは、誰一人として容赦はしなかった。出石城主山名祐豊は毛利と織田との間にはさまれて、その立場は揉みに揉まれていたが、それでもどちらかといえば、織田党

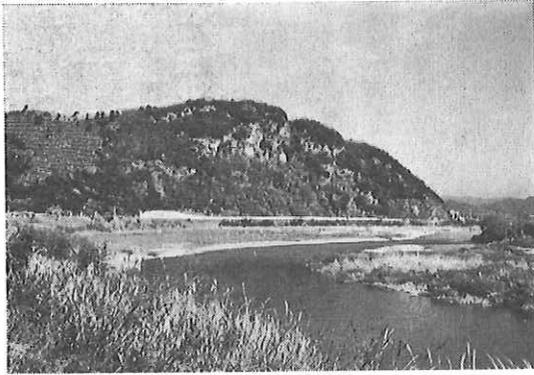


写真116 宿南と浅倉の間の岨道

色が濃かったにもかかわらず、秀吉は容赦しなかった。出石城に攻勢が加えられたのは、天正八年（一五八〇）五月だった。それだけに毛利党として終始して来た垣屋豊統が、秀吉の攻囲から逃れることは、ありえぬことだった。この時、垣屋豊統は、水生城の要塞を堅めて、秀吉軍を迎えたという。

水生城攻防戦については、籠城軍側の垣屋について、次のような話が伝わっている。もとより史料的な裏付けがあるという話ではない。徳川時代の中頃に、盛んに行われた軍記物という、小説ふうの歴史書の中に  
出てくる話である。大まかな筋を追えば次の如くである。

即ち、美含郡轟城主の垣屋駿河守・同平三は、秀吉が但馬に攻め寄せると聞いて、気多郡水生城に立籠って、林甫城主長某・上郷城主赤木丹後守・伊福城主下津屋伯耆守・国分寺城主大坪又四郎・宮井城主篠部伊賀守らと相談して、今、まさに山名衰えたりといえども、二百余年、この但馬の国守であった。どうしてむざむざと、但馬を秀吉にとられてなるものか。いまこそ、身をなげうって、恩を報ずる時ではないかといひ、次のような謀を立てた。秀吉が養父郡から進撃して来たならば、宿南と浅倉の間に一騎打の岨道そまみちがあり、上は岩石が張り出し、下は円山川の淵だ。そこに伏兵を設けて、城中の諸士、宿南野に出て、偽って、降伏を申し出で、太閤を欺いてこの岨道に引き入れ、伏兵一時に起って、大石を転がし、軍

兵前後より挟み討にすれば、秀吉を簡単に打ち取ることが出来ようというのである。養父郡小田村で一休みした秀吉は、宿南野に至った時、密告によってこの謀計を知り道を転じて浅間越えに出石城を攻め、ついで挾間坂を越えて、水生城を襲った。城中では、既に謀が洩れてしまっているため、戦うに力なく大将垣屋駿河守を始め、諸士、みな戦死してしまつたという。

これに対して、攻囲軍側の記録は、山鹿素行の著わした『武家事紀』によって、知られる。即ち、「秀吉播州をこえて、但馬征伐の時、山名老臣、垣屋駿河守、但馬に在国す、これによって、垣屋三千の兵を率し、水尾に出て陣を張る。先陣は長の某七百余、二陣に垣屋孫三郎に徳吉・安長という両家老が相加わる。三陣に駿河守逞兵をめぐりて出撃す。寄手は、伊藤与三右衛門三千ばかりにて押し寄せ、宮部はわずか五六百ばかりにて押し寄す。宮部主従八騎みな武羅をすすめて、まつ先にかけて入る。そのころ但馬の人、いまだ武羅を知らず。故にこれを見て、大いに駭く。垣屋先手長戦死す。伊藤つづいて相かかる。孫三郎が備え堅く守り、力戦して、伊藤ついで安長にうたれ、兵士悉く敗軍し、その日の戦はやみぬ。その後数回の対陣に、垣屋ついに秀吉の陣に降して、但馬平定す。世に水尾合戦という。但馬は美濃守秀長に賜る。宮部三万石を賜り、垣屋これが与力たり。

因幡征伐の時、宮部かりがね山において、垣屋を饗応し、その時双方戦功の輩、名乗り合つて証拠を出す。垣屋言いけるは、白羽織にて馬の背に乗りし人、一番に乗り込み、相戦いしこの人は誰人にやと問う。宮部、これは田中六兵衛とて、つかい立の者なりとて、呼び出し、献酬の礼にあずかるなり」という。

この田中六兵衛は、田中吉政のことらしい。後に、出雲の松江城主となつた人である。田中吉政の奮戦の

有様を、『武家事紀』は、別の箇所、次のように記述している。「但州水尾の合戦に、田中吉政、白紙子羽織にて長刀を持って黒馬に乗り、一陣に進む、垣屋が兵、大垣新右衛門と言うもの、但馬・丹後にかくれなき射手なり、この者の射る矢に、吉政胸板をわきへ射ぬかる。次の矢にて、また左のわきを射ぬく、吉政長刀をもって度々矢を切り払い、互いに久しく相戦って、相引きに引く、この合戦に宮部が郎従、十八人戦功ありといえども、吉政が働、比類なきにきわまる」と。

### 秀吉に降った垣屋

さて、水生城の攻防戦は、毛利党の轟城主系の垣屋豊統が、打った一大決戦だった。この攻防戦は、秀吉方の将、宮部善祥房が強襲をかけて、一挙に決したのではなくて、但馬に秀吉の勢力が延びると共に、いくたびか小競り合いが行われていた。既に天正八年（一五八〇）四月十八日には、織田勢と竹野衆とが水生城で交戦している。この時竹野衆が勝ったというので、山名氏政は、部下の下津屋丹後守を、古志因幡守の許に遣して、古志因幡守の戦功を賞すると共に、古志の一族、古志左衛門尉の戦死を悼んでいる。竹野勢というのは、いうまでもなく、轟城主の垣屋豊統のことだ。垣屋豊統は、水生城に出張し、織田勢と戦っている。

水生城は、上石の水生山の中腹にある長楽寺という真言寺院の裏から、標高百六十メートルの山頂に至る間に構築された城で、数カ所の平坦地が残っている。特に頂上近くや、頂上尾根ぞいの鞍部には防備の構としての堀割が数カ所、見られる。加えて東は險阻、北は切りたつ岩壁をなし、まさに要害の地であった。

それに、円山川の本流は、今でこそ、土居附近から東へ大きく湾流しているが、かつては土居の附近から

水生山麓にかけて一直線に北流していたことがあつたらしく、伏流水は、善応寺野の下を潜って水生山直下に吹き出していた。それでこのころ水生山下は沼沢状だったらしく、水生城攻略のためには、まづ沢に竹木を投げ入れて、渡らねばならなかったという。垣屋にとつては、まさに秀吉軍に対攻する最後の拠点であつたが、秀吉軍の強襲を持ち支える事が出来なかつた。

この時も、野田合戦の場合と同じく、垣屋は一族をあげて、轟城主の垣屋豊統の軍事行動に参加している。さわいえ、宗族たる楽々前城主系の垣屋光成と、轟城主系の垣屋豊統の立場は、食い違つたままで。飽くまで毛利党として終始する豊統の立場には、節に殉じる武人の純粹さが見られるが反面、何をおいても織田党と戦い抜かねば止まぬという陋固な武人の姿が浮び上るだけだった。恐らく垣屋豊統は、この時、城と共に運命を一つにしたことだろうか、轟城主系の垣屋はここに全く滅亡してしまう。これに対して宗家たる垣屋光成は、却つて、現実的に身を処している。またこのために楽々前城主系の垣屋は、しばらく関ヶ原の戦いまで、命脈を保つことになる。

さて建立されてから約七百年、法灯をもやし続けていた国分寺も、この時、兵火に災したと伝え、宵田城も、同時攻撃を受け、城主垣屋隠岐守峯信は、城を脱して、間道を通つて楽々前城に入つて、再び挑戦したが、討死したといひ、鶴ヶ峯城の垣屋播磨守光成も、ほどなく、秀吉の軍門に降つたといひ、楽々前城といひ、鶴ヶ峯城といひ、共に、垣屋にとつては、垣屋の本領地の居城であつた。永禄十二年（一五六九）、信長の雲伯因合力作戦に際して、秀吉は、この垣屋の本拠地の鶴ヶ峯城には、手をつけていなかった。今や、秀吉は垣屋の本領を完全に覆滅するまで、攻撃の手をゆるめてはいなかつた。毛利の力がせめて、因幡にで

支援する。



写真117 善応寺裏平野（府市場）

も残っている時なら、垣屋豊統は毛利の援を当てにするような戦法を、本拠地であるこの気多郡西部山岳地帯で展開し得たであろうが、毛利が但因から総撤収を行っている現状下では、秀吉軍の前に、城門を開かねばならなかった、降将、垣屋は二百年にわたって保持した本拠地を失ってしまった。既にふれたように垣屋の本拠地には新しい息吹きにも似て「観音寺村」というような地域連合体が成立しかかっていた。これを基盤として、垣屋は勢威を振っていたが、秀吉は、垣屋をこれらの地域から追放して、垣屋の伝統性と土着性を全く否定してしまった。垣屋が、このあと、命脈を保とうとするならば、毛利党の立場を完全に放棄し、秀吉の付将としての働きが秀吉によって承認され、秀吉との新たな封建関係が結ばれる時だ。垣屋は、秀吉軍の先鋒となって、秀吉の因幡討伐戦を積極的に

### 垣屋因幡巨濃城主となる

守をいまず浦富の桐山城に入れておいたが、この時山名豊国は、秀吉の威光に恐れて、秀吉に降ってしまった

秀吉に降った垣屋光成は、八木・磯部らと共に二方郡の芦屋城の攻略に向う。芦屋城主塩冶周防守は逃れて鳥取の山名豊国に頼った。そこで秀吉は垣屋播磨

た。ところが、豊国の家臣団の中には、牛尾大藏左衛門春重のように、毛利に気脈を通じる連中がいて、豊国を鳥取城から追っ払い、勢にまかせて、更に、浦富桐山城の垣屋を攻めた。垣屋も良く守り、城中から射出した矢に、牛尾は腹を射抜かれて退き、やがて、この傷がもとで死亡してしまう。『因幡民談記』によるとこの時浦富の桐山城に入って守っていたのは、垣屋播磨守光成で、その子垣屋隠岐守は、巨濃の口に拠点を構えていたという。そしてこの辺は海辺に近い所であったから、垣屋は番舟を出し、海上往來の舟を留め敵味方を吟味して、毛利の軍勢が、人員、資材を鳥取城に入れさせないようにさせていたという。また鳥取城攻囲に参加し、天正九年（一五八一）には、秀吉の本陣附近の下の丸には、垣屋播磨守が、ウツロの上には垣屋隠岐守が布陣し、鳥取城の吉川経家を遠まきにしていた。かくて、天正九年（一五八一）十月二十五日、鳥取城が落城するに及んで、垣屋播磨守は鳥取の巨濃に一万石を得て浦住の木山城に在城することとなった。秀吉は天正五年（一五七七）、から天正八年（一五八〇）、にかけて、但馬の拠点作りに成功した。この時、但馬に従来からいついていた勢力をすべて、否定してしまった。山名及びその高級家臣団は、すべて、但馬の所領を失ってしまった。垣屋も、その一人で、身を翻して、秀吉の鳥取攻めに従い、やっとのことで、代りの所領を、因幡の国で確保することが出来た。

その後、木山城の播磨守は、老体隠居して、宗叡と号し隠岐守が家督となった。

天正十五年（一五八七）、秀吉は九州征伐を行う。この隠岐守には四百人の軍役が課せられた。当時二十石につき一人という定めであったから、四百人ということは、隠岐守の所領高一万石の中、二千石を無役として、引き去った八千石に対して、軍役が課せられた訳だ。

そのご、文禄元年（一五九二）、秀吉は朝鮮半島に出兵するが、この時、垣屋光成は七十を越す老体で、老病に侵され、明日とも知らぬ病床に臥していた。いづれは秀吉から朝鮮渡海が下令されることは予想されていたが、その時、重病の垣屋光成に代って、垣屋隱岐守恒総（つねさぶ）が出陣することとなるが、とはいえ、恒総にとっては、光成の病気を理由に、朝鮮参陣に遅れをとってはならないし、また、参陣の門出に当って、忌に服しては、除服の日まで、数日の日数が経過し、それだけ、参陣が遅れることになりそうだった。それで、定められた日に、出陣しようとするならば、病人の光成を見捨てて出発することは勿論、万が一、出発前に、光成が死するようなことがあったとしても、あくまで病中の態として、光成には知らせてはならないことだった。皮肉なことには、垣屋隱岐守が出陣の前夜、光成は死去したのである。垣屋隱岐守は、父の死を知らされないまま、軍装を整え、翌朝、海西の旅に立った。このあと、留守居の者で、葬儀を営み、城山の麓に墓を築き、やがて、飛脚を立てて、この旨を朝鮮に書で送っている。朝鮮に於ける、垣屋隱岐守の行動については、何ら資料が残されていない。恐らく、鳥取城主、宮部善祥房らと一緒に、釜山から朝鮮国都京城の間で、活躍していたものらしい。

### 垣屋恒総の死

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の役が起きるや、垣屋隱岐守は、若桜の木下備中守と一緒に、大阪に着陣し、諸將と共に、伏見城の鳥居元忠を攻めた。垣屋の家来の中では、家老の垣屋新長次、其の外の侍、安田紀伊守・川木六郎左衛門・同長助・石加賀之助・垣屋久閑などの奮戦が目立っていた。続いて、諸將と共に京極高次の守備する大津城を攻め、やがて関ヶ原へと赴かんとしていた

が、関ヶ原で、既に戦が始まり、どうやら垣屋の属する西軍の旗色がよくないとの情報、風の便りに伝わって来ると見る中に、落ち来る敗軍の諸兵に出合った。味方が敗れたとあっては、垣屋としては、為すすべもなく、高野山に隠れた。高野山の千手院谷には、日頃垣屋と師壇の關係を結んでいた僧がいたので、その許に身を寄せ、やがて、天下の赦免があるうかと心待ちにしていたが、却って、高野山には垣屋が潜んでいるとの噂が高くなり、やがて、検使が来り、自害すべしとの命を伝えたので、切腹し果てたという。

こうして、垣屋は関東から、但馬にやって来て、二百年の年月を積み重ねたが、但馬を追われて、因幡に新住の地を得たものの、それは、二十年しか保たなかった。他方、留守の桐山城では、城主を失い、茫然としていると、折しも、但馬の竹田城主、赤松広通の部下どもがこれを見舞に出て来た。赤松広通も、関ヶ原の役に、西軍に属していたが、因幡の亀井茲矩しむのりに頼って東軍に降っていた。亀井は徳川家康から、帰国して、因伯を平定せよと命じられていて、西軍に属して敗れた諸將の遺臣に対して、居城を撤退するように諭していた。鳥取城主宮部の遺臣は、城を守って降伏しなかったので、亀井は鳥取城を攻めめぐみ、赤松に協力を求めていた所だった。この赤松軍が、兵具・槍・長刀を帯し、紙のぼりを指して、浦住の町を通って来たのだから、桐山城の留守居の者は、大いに驚き、鳥取城同様に、この城も攻められるのかと、勘違いして、取るもの取りあえず、城を後に出てしまった。この時、家中の者、隠岐守内室や子どもを引連れて、但馬を目指して逃げ、故地の西気谷を目指したという。

### 第三節 日高町域の山城

#### 山上に眠る遺構

『但馬の城』という書物によれば、昭和五十年の夏、現在において確認されている但馬の山城も、まだあるだろうから、但馬の山城の数は、いくらか少なく見積っても、二百余城ということになる。その殆んど大部分が、戦国の様相が、たかまりを見せていた時のもので、各地に根を張り出した諸豪族が、本拠としたものだった。中には、相互の間に群を構成し、支城や砦などを引廻しているものもあった。

そしてこの城というものは、諸豪族たちが自らの生命を、自らの手で守ろうとして要害の地を求めて、あるいは小山の尾根筋や独立丘の頂上に築かれたものであったから、気多郡の川筋や谷筋で、遅ましく生き抜こうとした人たちの、去就を探る大きな手だてとなるものだった。その城が日高町域にては二十も検出されている。但馬全体の数から見れば、約一割弱で、思いの外にその数が少ないとは言うものの、流石に垣屋が関係している地域だけのことはあって、但馬史の推移に関係する重要な城のいくつかが含まれている。日高町域に存在する諸域については、既に、ふれておいたものもいくつかあるが、改めてその所在地とその現況及び城史の変遷を、土地の所伝にのみ耳を傾けつつ、略述して見れば、次の如くである。

もとよりこの場合、城史にまつわる話は、時人が持ち伝えた伝承であって、客観的な資料に裏付けられた史実でないことは、断るまでもないことだ。

① 宵田城。岩中字城山にあり、三段の城壘をなし、かなり広い。明徳年中（一三九〇～一三九四）、垣屋播磨守隆国、郡代として居城し、ついで二男隠岐守国重の居城となり、天正八年（一五八〇）垣屋隠岐守峰信、豊臣秀吉の進攻を受けると、遁れて楽々前城に至り討死したため、廃城となったという。

② 上郷城。上郷字城山（じょうのやま）にある。二段の城壘をもち、極く一部分に石垣が残っている。天徳年間（九五七～六一）源満仲、但馬国司として赴任した時、築いて居住し、ついで、その子頼光も止住したと伝えるが、全く信を置くわけには行かないものだ。戦国期の城主は赤木丹後守といい、後でふれる如く、水生城合戦に参加した武士だという。廃城の時期も、このころだろうという。

③ 水生城。上石字水生にある。水生山長楽寺の裏から山頂に至る間に、数カ所の平坦地があり、頂上近くや頂上に伸びる尾根に堀割が数カ所ある。南北朝のころ長左衛門尉が居城したと伝え、戦国期には初め榊原式部大輔政忠が居し、ついで西村丹後守の居城となったというが、矢張り伝承の域を出ない話だろう。天正八年（一五八〇）秀吉の部将、宮部善祥房らの強襲を受けて陥り廃城となるが、この時、守備軍にまつわる伝承や、攻囲軍の戦闘ぶりについては既に本章第二節水生城の戦の項においてふれておいた。

また別の伝承によれば永禄二年（一五五九）に、伊福の郷士、河本新八郎重成というものが垣屋の手に属して水生城の攻囲に従い、善野寺野合戦に於て、感状に預る戦功を立てたといっている。

④ 祢布城。祢布字城山にある。山頂にかなりの広さの三段の構がある。南北朝時代、城主高田次郎貞長が住んでいたが、山名時代に亡ぼされて以来、廃城となるという。

⑤ 森山城。森山にある「あかんじゃ」とも「あかんじょ」とも呼ばれ、森山と知見境にある低い山に、二

段の土塁と三カ所の堀切りが存している。麓には「蓮池」という水田がある。応安から享禄（一三六八〜一五三二）にわたる永い期間、安田氏の居城で、城主として安田左近将監・安田紀伊守の名前が知られているという。

⑥ 楽々前城。佐田字城山にある。別名を佐田城という。日高町第一の雄大な山城で、佐田から道場に及ぶ南北一・五キロメートルの間にわたっている。道場の裏山手に、「中ノ丸」があり、間道をのぼって広場に至る。「三ノ丸」「二ノ丸」を経て佐田の裏山の「本丸」に至る。また楽々前城に關係するらしい地名として道場の東方に「東構」、久斗には「北構」・「南構」の地名が存している。垣屋播磨守隆国の居城と伝え、天正八年宵田城主垣屋隠岐守峰信、秀吉軍の攻囲を受けるや、逃れてこの城に至り、ここで討死したという。

⑦ 伊福城。鶴岡字城山にある。わずか百メートル足らずの山城だが、頂上の平坦部の広さは、城崎郡の古城跡中の第一位のものかと思われる。この下に三段の塁が構築され、西側は切立った壁をなし、円山川に臨んでいる。康正元年（一四五五）〜天正八年（一五八〇）の間の城地だったという。城主下津屋伯耆守は、水生合戦に加わり末路は不明だとも伝えている。

⑧ 国分寺城。国分寺字城山。城跡は三段に切り開かれ、裏手北方の水上方には三重構築の堀割がある。城跡からは多量の焼米が出土している。延徳三年（一四九一）から天正年間にわたる城塞で、城主大坪又四郎は、伊福城の下津屋伯耆守とともに水生合戦に参加したと伝えている。

⑨ 篠森城。別名を笹が丸城という。久田谷にある。即ち久田谷の入口の低い小山があり、通称「稲葉山」

といっているが、頂上部に若干の平地が構築されている。一、五〇〇年頃から元龜三年（一五七二）ごろにわたる山寨で、足立忠紀・足立肥前守が居していたという。

⑩鶴ヶ峰城。観音寺城山にある。俗に三方富士と呼ばれている鶴峰山（四〇〇メートル）にある三段式の山城で、永正九年（一五一二）から天正八年（一五八〇）にかけて、垣屋統成・光成が居城したといっている。

⑪進美寺城。赤崎字進美寺にある。これはとりわけて城跡とすべきものではなからう。中世に於ては、山岳の中に建築されていた大寺院が、ともすれば軍事目的に利用され、これの争奪をめぐる合戦が展開していた。進美寺も、そうした性格を持っている寺院で、既にふれた如く、南北朝の争乱期には、たびたび、吉野側の南軍と京都側の北軍とが交戦していた。また俗伝によると、戦国時代の末頃、進美寺に搔上の城が築かれたという。搔上の城というのは、応急的にしつらえた城という意味あいのもので、攻防を主目的とした城が構築されたものではなかつたろう。

⑫山宮城。山宮の奥にある低い小山で、頂上には狭い平地がいくつも作られている。天正年間（一五七三〜九一）ころのものといひ、山宮城には、大岡山から水を引いたという「せんだんびつ」・「横みぞ」・「なだれ尾」・「とびあな」等の地名が残り、「とびあな」附近から古鏡が二ヶ出土している。また、山宮の中央付近には、土塁で囲まれた館があったという。近くに「西の城」という字名が残っているが、城主太田垣式部の姫君の居所だったという。太田垣式部は、水生城合戦に際して、間道八代道をぬけて水生城に急進し、但馬方に加わって戦ったが、敗れて滅亡したという。

⑬八代城。谷字城山にある。山頂にかなりの平坦部があり、山頂への途中には各所に堀割があるが、かなり埋没している。築城年代は不明だが、藤井左京が城主だったと伝えている。

⑭奥八代砦。奥八代字宝城及び字南山にある。八代川も猪爪から上流部あたりでは、南北から迫る山容の中を、窮屈そうに流れているが、この八代川を挟んだ奥八代川附近では、北に宝城、南に南山城が築かれ、両者一体となって八代砦を形成していたという。築城年代、城主名は伝っていない。

⑮岩山城。浅倉にある。山陰線浅倉トンネルの上部、東の方の側に屏風のように屹立した岩山が城跡で、三段の平地が形成されているが狭少だ。麓下には円山川が迫って淵をなし、「浅倉の岩歩危」という。既にふれた如く、伝承によれば、水生城に籠城せんとした但馬勢は、奇計をもって秀吉軍をこの岨道に引き入れ、山上より大石を落して、秀吉軍を円山川に突き落とし、漂うところを、伏兵を出して討ち取る。うと図ったが、水生籠城軍の軍将西村丹後守に宿意を抱く、宮井の城主（豊岡市宮井）篠部伊賀守は、郷土藤井伊助を使者として、この謀計を進攻の秀吉に通報したため、秀吉は攻撃路を変更して、浅間坂を越えて出石城攻めにかかったという故地である。築城年代は不明。寛政十二年（一八〇〇）の『浅倉地図』には、岩山城主は佐々木近江守だと記している。

⑯太田城山。太田にある。太田神鍋の西方にある低い山を「じゃう山」と呼んでいる。築城年代・城主名は不詳。

⑰東河内城山。東河内にある。東河内の背嶺で竹野町との境附近に「城山」という字名があり、山頂は削平され、堀切りが三方所ある。城主その他不詳。

⑱ 万場城山。万場の奥にある低い小山が城跡だという。

⑲ 名色城山。名色の南方備前山の山裾の低い小山を「しろやま」と呼んでいる。頂上付近には石垣や堀切りらしい跡がある。

⑳ 稲葉城。稲葉にある低い小山が城跡だといい、城主は大森飛弾守といったという。

### 城にまつわる話の虚と実

このように、日高の町域には、二十カ所に及ぶ古城跡の存在が指摘されるが、それにまつわる所伝は、前項にも冒頭に於て断っておいた如く、飽くまでも、その土地に於て語りつがれてきた話であって、日高の町史の中に、映耀する史実ではない事は勿論だ。それどころか逆に、寓目した史料を底本として、城の城主の名前が選定されたと思われるような場合もある。森山所在の森山城の城主が安田左近将監・安田紀伊守だといわれているのがその一例で、たまたま、垣屋に係する文書の中に、安田氏の名前が載っていたために思いつかれたものようだ。その文書も、安田千松丸の父、源三郎統貞が森山城で戦死したと書いてあるだけのこと、安田統貞が森山城主だったとは書いてないのである。それどころか、この文書からは安田が森山城を攻めていたものか、森山城を守っていたものかどうかということすら推測できない状態だ。それなのに森山城に関連して安田の名前が見いだされることから、簡単に、安田が森山城主だったときめてかかられている。

他面、土地に伝わる城の物語り中にも、なにか核となるものがあって、それが、なにげなく語られている場合もあるようだ。例えば、伊福城の城主が下津屋伯耆守だと語られているのがそれである。この下津屋伯

耆守という武将の名は、徳川時代の中期ごろに書かれたと思われる軍談風の但馬の歴史書の中にも見えている。即ち、因幡の国で、滑良兵庫と伊達新助のこの二人の武士が争っていた。この事態の収拾に手を焼いた因幡守護の山名棟豊は、在洛している惣本家の山名宗全に、何とか鎮めてもらえないかと頼み込んだ。宗全は、即座に、但馬在国の篠部伊賀守と下津屋伯耆守に命じて、討伐させた。両武将は三百騎を率いて出陣し、この武力を背景に、滑良と伊達を威圧して、両者を和解させたというのである。

この話を裏付ける資料は一つとして存在していないだけに、ここに登場する下津屋伯耆守がそのころ、伊福城主であったかどうかということについては確証がない。にもかかわらず、下津屋が伊福城主だったと信じられ、そのように語られている背後には、下津屋が伊福城主であってもよいような客観的な状況が存在していたのではなからうか。

### 下津屋新三郎

下津屋という武士は、但馬守護山名の配下の武将ではあるが、山名の家来の中には、いくつかの階層があつて、山名の四天王といわれる垣屋・太田垣・田結庄・八木などに比べると、一段と格が下る部将であつた。垣屋・八木らが自立化の勢を進めようとしている時、守護山名が、ほんとうに力を但馬の武将の中に浸みこませていたのは、この下津屋級の武士団だったのである。既にふれた如く、下津屋安芸寺は伊秩美作守・宮下野守らと共に、泉州堺に亡命していた山名祐豊が、織田信長の了解の下に永禄十三年（一五七〇）の冬、再び但馬入りをしようとした時、祐豊の居城たる子守城を占拠していた垣屋を放逐しようと、子守城攻めを行った武将であつた。このように山名に付していたのが、下津屋であ



写真118 伊福城跡遠望（鶴岡）

する目付役として理解しようとするならば、この時の伊福城主は、軍談風の歴史書が伝えるように山名宗全のころの人である下津屋伯耆守となし、時代をくり上げて考えるよりは、むしろ戦国の争乱期、子守城を攻めたてた下津屋安芸守だと考えた方が、すつきりする。さらに、考え合わされることは、この下津屋安芸守の名前が知られるより、さらに五十年くらい前に、既に下津屋新三郎という山名の配下の武士の名前が記録に上っていることである。即ち、永正五年（一五〇八）七月、但馬守護山名致豊は、下津屋新三郎をして、

り、山名もまた下津屋に対しては、深く頼むところがあつたと思わなければならぬ。それだから、気多郡から下流の城崎郡にかけて垣屋の勢力が張り出してくるようになり、垣屋が強勢な姿を見せると、これに対抗するために祐豊は、自分の信頼する武将を気多郡の中に配置させる必要がひしひしと感じられていたものではなからうか。山名祐豊が、その目付役として腹心の部下を伊福城主に補して、対岸の垣屋を監視させることは、ありうる話と見てよからう。若しそうだとすれば、下津屋という部将は、そのためには、うってつけの人物であつたらう。下津屋が伊福城の城主であつてもよいような可能性は、こうしたことにあるだろうし、それがまた、核となって、伊福城主は下津屋だという記憶が、現在まで保持され来つたものだろう。さはいえ、下津屋を垣屋に対

但馬所々知行、清冷寺分代官職及び備後・播磨・伯耆の諸知行所地などを安堵している。下津屋新三郎は、守護大名山名の勢力圏内の各地に、このように多くの所領を有していた人だったが、その中の一つが清冷寺代官職だと記せられている如く、今は豊岡市域に編入しているが、もともとは気多郡域の中であつた清冷寺という大字の地域全般にわたつて、守護山名のもとで、地方勢力者として、在番に當つていたことだろう。

下津屋は古くから気多郡に關係を有していた人であり、且つ、山名の忠実な番犬役を勤めていた武士だ。また、既にふれた如く、天正八年四月十八日水生表で、織田勢と垣屋豊統とが交戦した時、垣屋方の古志因幡守が立てた武功を、山名氏政は、下津屋丹後守を遣わして、褒めていることから知られる如く、但馬守護山名の最末期の時期においても、下津屋は山名に深くかかつていた。下津屋が垣屋に対して監視の目を注ぎたいとするなら、何にもまして、伊福城は恰好の城であつたろう。

### 宵田の町場

このように、日高町域に残る古城跡について、土地の人々の間に保持されていた話の中には、全くこじつけと思われる話が存する反面、なにか歴史的事実の記憶の断片が保存されている場合もあつた。伊福城の例の如きは、垣屋に対する對抗勢力者が、この気多郡の中に、政略的に投入されている事を示している。この場合、下津屋が、その人であつたが、恐らくこの下津屋は、但馬に於て成長し強大となつた武士ではなかつたようだ。守護山名に尽した武功により、但馬において、各所の地を恩給されてきた。かくして、下津屋は、伊福城の城主ともなつたのだろうが、この伊福城とても、下津屋が初めて築城したというのではなく、それに先立つころ、既に、この地に根を張つていた土豪の本拠地を押し収めて

いたものではなかっただろうか。

西気地区には、「城山」と呼ばれるのみで、それが何時の時代築かれ、誰が城主であって、またどのような経緯が判明しない山城がいくつも散在している。「山城」というものの変遷は、もともとこうしたものであって、築城から廢城に至る迄の歴史が克明に知られるものがあれば、それはむしろ例外的な事例だった。山頂に築いた城は、地方の豪族にとっては、自らの生命をかけた本拠ではあったが、垣屋や下津屋のような自立的な勢力が、頭を擡げてくると、彼等は自己の城を要害化していくと共に、このような地方豪族の城はその属城として、再編成されていたことだろう。

こうして、日高町の町域にも、守護大名山名の勢力をしのぐような垣屋という勢力者の城が、いくつか記憶され指摘されている一方で、かかわる由緒すら全く忘れられた城が、いくつも存在していたのである。いづれの城としても、天正三年（一五七五）のころから特にその偉力を見せはじめた秀吉の軍団のために、なぎ倒され、ひともみにもみ砕かれてしまった。秀吉が但馬に進攻してきたのは、毛利と対抗するために、但馬を拠点化する必要があったためであるが、その実、天下人、豊臣秀吉が、最も恐れたものは、このような「山城」を築いているような豪族の去就であり、土地と結びついていた勢力であった。秀吉は、彼等が農民と結びついて武士化しようとするのを徹底的に阻止しようとしていた。秀吉は、在地の土豪の勢力を根だおしにしようとしていた。気多郡といわず、但馬の全域にわたって、城と名のつくものはすべて、押し潰し、再び、在地の豪族の拠点として復活することがないようにしていた。

こうして、秀吉は進攻地に対して、まづ農村支配の基礎を確立しようとして、検地を行った。検地とは農

民の保有地を調査し測量することだ。秀吉は地味のよしあしを調べ、面積を確定し、所有関係を記録していかうとした。この気多郡では、何時それが行われたか分明しないが、但馬の山間部では、天正六年（一五七八）既に検地が行われている地域があるから、恐らく、この頃、この気多郡でもまず最初の検地が行われていたことだろう。そして文禄三年（一五九四）には全但馬的な再検地が行われている。この気多郡も適用されていた筈だが、その記録は残っていない。

秀吉は、また後年に至って、刀狩りを行った。武装して立っていた豪農層はもとよりのこと、村落からも武器を没収したのである。武器なき豪農層は、その命脈を長らえるためには、いやでも在地の地主として満足しなければならなかった。このような仕組の上に、近世という新しい時代が展開しようとしている。秀吉は、但馬進攻が成功裡に完了すると直ちに、羽柴秀長をして、但馬を領知させている。この秀吉に対して、気多郡宵田村の人たちは、町場の設置を願ひ出ている。宵田の地は、かつて垣屋の分流が居城した宵田城の城下町として、物資の集散が行われていた土地だったろう。稲葉川の開口部に当り、また円山川との合流点でもあった。山地部の物資と平野部の産物が、この宵田の地で交換されてきている。この宵田の地の殷賑さをふまえての歎願であったが、やっと町場として認証されたのは、天正十三年（一五八五）のことだった。この年、出石城主に補された前野長泰が認証したものだ。

この天正十三年という年は、秀吉が関白に就任し、豊臣政権維持のために、大々的に大名の入れ換えを行った年だ。新しい政治のしくみが、着々と展開しかけている時だ。気多郡の地も、がっちりとその網の目が覆いかぶさって来ている。近世という、我々の時代に近しい時代の開幕が近づいている。

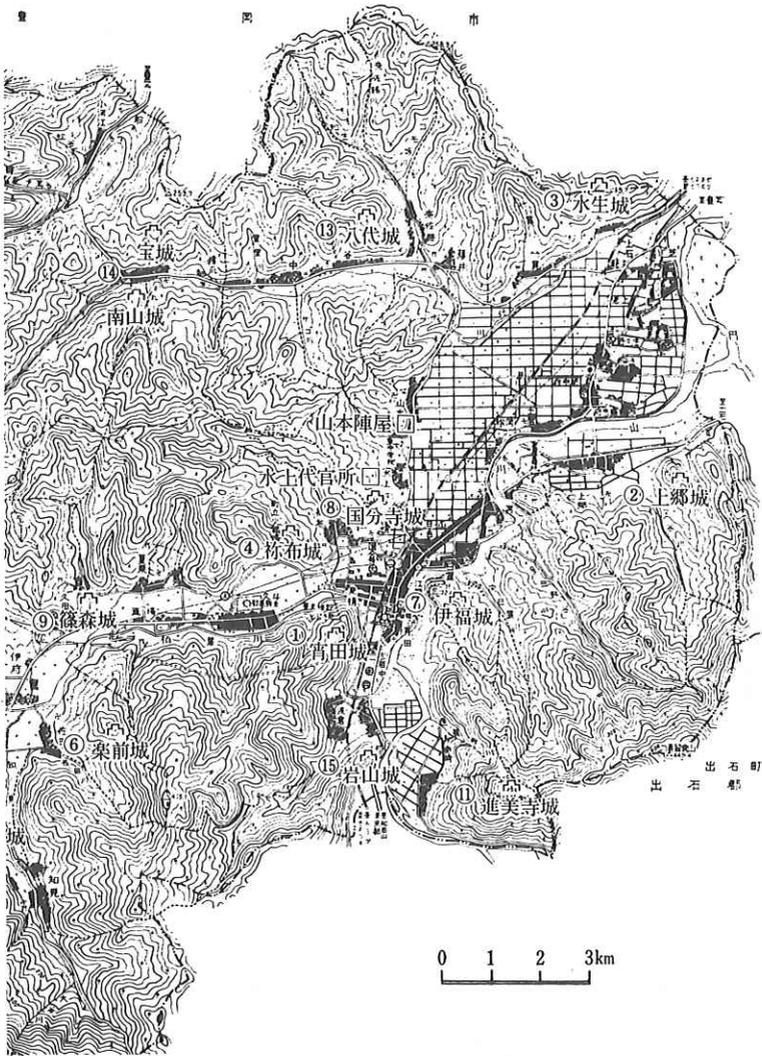


図49 日高町山城跡分布図

